

杉本苑子

鳥影の関
〈上〉



杉本苑子

鳥影の関
〈上〉

鳥影の関とりかげ せき

上

定価 1,100 円

著者——杉本苑子すぎもとそのこ

編集人——守屋健郎

発行人——加藤祥二

発行所——読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一

〒一〇〇

大阪府北区野崎町八の一〇

〒五三〇

北九州市小倉北区明和町一の一

〒八〇二

印刷所——株式会社精興社

凸版印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——昭和五十七年十二月二十一日

第三刷——昭和五十八年一月二十五日

0093-703420-8715

© 1982, Sonoko Sugimoto

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

鳥影の関
上
目次

湯けむり 7

今日降る雪 57

東光庵浅春 IIII

緋ざくら 168

花ごろも

207

新樹

257

夏富士

315

装画・装幀
粟屋
充

鳥影の関上

湯けむり

秋^{あき}闌けると、目に見えて霧が深くなる。芦ノ湖から湧^わき出すそれは、湖面^{こゝろ}じたいを覆いつくすばかりでなく、まわりの山や、岸辺の人家までを、白い、軽やかな紗幕^{しゃまく}の底にすっぽり包みこんだ。

そんな日は、一日じゅう日がささず、霧は霽^はれないまま夕ぐれを迎える。

「風流な眺めだなどとするこんではおれぬなあ、こう、うっとうしい日ばかりつづいては……」

夫の唧^{ささ}ち顔を、いまでも時おり小静は思い起こすことがある。

「洗^{せん}い物は乾かぬ。家の中は湿る。歌も俳諧^{はいかい}も案^{あん}じ出すところではないよ」

取りなして、かならずそんなとき小静は夫に言ったものだ。

「そのかわりすっきり青空がひろがった日の気持のよさは、かくべつでございます。いながらに富士は見えるし紅葉^{もみぢ}はあざやかだし……。山住みなればこそ味わえる楽しみではありませんまいか」

「それはそうだ。ま、そう思って我慢するのだな」

笑い合った相手は、もうこの世にいない。去年、秋のはじめに風邪をこじらせて、あっけなく天野民部^{あまのたみべ}は亡くなったのだ。

当座、小静は気抜けした。いきなり緊張がほぐれ、身体が宙に浮き上ってでもゆくような甘悲しい放心

に捉とらわれた。

「よかった。ともあれ無事に夫を畳の上で死なせることができて……」

まかりまちがえば刃やいばを浴あびて、民部は命を落とすことになったかも知れないのである。もと出羽米沢の藩士だった彼は、ささいな意見のくいちがいから同僚を斬きり、主家を出奔してここ、元箱根の権現領に潜んだ。いわゆる仇持かたぎちの身になったのであった。

「いま思い返せば、若氣のあやまち……。つくづく短慮が悔やまれる。いさぎよく名乗り出て遺族に討たれてやってもよい」

弱氣になる民部を妻の小静が懸命にはげまし、十数年ものあいだ、ともかくも隠れ通すことができたのは、ひとり娘の小光こみつに歎きを見せたくない一心からだった。

四年前、その小光は塔ノ沢の湯宿ゆどにとつぎ、民部も尋常びようぼつに病歿して、このほど一周忌の法要をすませた。湖畔の借家に、小静は独り取り残されたのである。

まるで、それを待ってでもいたように、

「ご在宅かな？」

訪ねてきた男がいる。

「わしじゃよ。塚本倉三でござる」

箱根関所に勤務する初老の定番人じょうばんであった。

「じつは小静どの、おりいってそなたにたのみがある。聞いてくれまいか」

この朝も霧が濃く、塚本の髪にも肩にもこまかな水滴が銀砂ぎんさを吹きつけたように燦きらめいていた。

「これは塚本さま、改まって何ご用でござりましょう」

「ほかでもない、そなた、箱根のお関所に入見女ひとみおんなとして出仕する気はないかな」

「わたくしが人見女に？」

小静は目をみはった。

着痩せするたちなのか、肉付きはけっして悪くないのに、挽しないそうに肩先が薄い。剃り落とした眉まゆの青さが色じろな肌をいっそう肌理きめこまかく見せている。紅もささない。それでいて唇は、ほんのりといつも赤く、お齒黒はぐろの艶えきがなまめかしかった。

四十二という実際の年よりも五つ六つ若く見える小静が、夫に死に別れて一年になる今日まで、浮いた噂うわさひとつ立てられず、それどころか、いまなお、

「天野先生のご新造さん」

と呼ばれて町民に敬愛されているのは、天性、身に備わった気品ばかりでなく、内部から彼女を支える一種の気迫が、立ち居や言葉のはしばしに自然と滲にじみ出るからであった。仇持かたきちの夫に添そって、探索者の目から絶えずその安全を守ろうとした日々……。いわば張りつめて生きた歳月が、小静を研みがいたといえるだろう。

げんに塚本倉三も、

「どうぞ、おあがりくださいませ」

座敷へ招じ入れようとする小静に、手を振って、

「いやいや、美しい後家どのの一人住まいにこのこあがりこんで、あらぬ風評など立てられては、みどもはよくてもそちらに迷惑。ここで結構けいこくじゃ」

縁先に腰をおろして話しはじめた。

「知っての通り、人見女の定員は三人が決まりじゃが経費節約のご趣旨もあり、ここ十年近く一人欠けたまま補充もせず、二人のみで勤めておった。ところが、小静どの。うちの一人が脚氣かつけを病んでこのほ

ど退職してな、石川の女房だけになってしまったのじゃ」

「お徳さまでござりますか」

「うん、あの婆さま一人では、万一、寝込まれでもしたとき法返しがつかぬ。口ばかりは達者だが、六十年かばの年寄りじゃでな。これまた、いつ何とき煩いつくか、油断はならぬのじゃ」

そこで定番人が鳩首協議して、そなたに白羽の矢を立てたのじゃと聞かされても、小静は途方にくれるばかりであった。

箱根関所は、つい目と鼻の先にある。しかし小静はまだ一度も、関所を通して三島側へくだって行つた体験を持たない。

関所のすぐ向こうに拡がる箱根宿——。家かず二百軒を越すにぎやかな宿駅の灯を、隣り町でいながらいまだかつて、かいま見たことさえないのである。

小静一人に限らない。そんな女は、元箱根にたくさんいたし、おそらく箱根宿にも、関のこちら側を一生涯、覗いたことのない女が無数にいるはずであった。

関所とは、つまり、そこを通過する旅人にとって面倒な存在であったばかりでなく、関を挟んで東西にひらけた二つの町の住民にも、おたがいの行き来をはばむ厄介なじゃまものだったわけである。

関の西側の箱根宿。

関の東にある元箱根。

芦ノ湖の水は双方の岸を、同じように洗っているし、大声で呼び合えば聞こえそうなほど両町の距離は近いのに、人々は自由な交際すらままならない。

こんな話を小静も聞いたことがある。箱根宿に住む小間物屋の主人が、のっぴきならない用ができたため手形を申請し、関所役人の検問を受けて元箱根へやって来た。ところが用事をすませていざ、帰ろうと

するまぎわに、急病にかかって頓死してしまったのである。

さあ、大変だ。手形の文面は、生き身の小間物屋一人の通行を認めているけれども、『死骸』となった彼を通すとはでは書いてない。それでなくても死体の通過、首級の持ち運びなどにはしちむずかしい調べや手続きが要る。

暑いさかりではあり、ぐずぐず日数をかけてはいられなかった。仕方がない。小間物屋の亡きがらは、先祖代々の菩提寺が箱根町にありながら縁もゆかりもない元箱根に埋葬しなければならなくなった。

隣り近所、親類が集まったの葬式も出せぬまま、他町に住む他人の手だけでひっそり葬むられたと聞いて、

「ご当人はもとより、家族もさぞ心残りだったでしょうなあ」

小静はそぞろ、同情したのをおぼえている。

うっかり恋など語れないし、嫁取りや婿取りも禁物だった。孫が生まれた、やれ宮参りだ、盆暮れの届け物だといっても、姻戚同士おいそれとは行ったり来たりができない。いちいちそのたびに関手形を貰わねばならぬ煩雑さに、だれしもが二の足を踏んだ。

心ならずも、だから両町の住民のつき合いは疎くならざるをえなかった。

箱根関所によって、おたがいの交流がぶつ切り断ち切られているために、関の東に位置する元箱根の人たちは、いきおい小田原や江戸の動静に関心を示す率が高くなり、あべこべに西側に住む箱根宿のひとびとは三島から駿府、名古屋、さらにその先につらなる京、大坂の空に、視線を放つ機会が多くなった。

東海道という一線上に並びながら、接点に関所が設けられた結果、二つの町は背中合せのよそよそしさや余儀なくされ、町民たちの生活意識までが、いささか大げさにいえば元箱根は東国文化圏、箱根宿は上方指向の西国文化圏に、すっぱり、分断されてしまったともいえるのである。

女性の通行は、特にきびしく見張られていた。中でも『出女』の監視が、箱根関所の重大な任務だった。東から西へ——つまり江戸を出て上方のぼりする女たちに、関役人はことさら目を光らせるのである。

塚本倉三が口にした人見女なる役職は、いってみればこの『出女』に対する身体検査役なのであった。

「とても、わたくしなどに勤まる仕事とは思えません……」

尻ごみする小静へ、

「なあに、懸念にはおよばぬよ」

こともなげに塚本は手を振ってみせた。

「役目じたいは、すこしもむずかしいものではない。なにせあの、石川のおしゃべり婆にさえ勤まるお役じゃでな」

と、前歯の欠けた洞抜け声で笑う。少々、小狡いと評判されている定番人だが人当りは柔かな男なのである。

「つづめて申さば、しんじつ女か否か、確かめてさえくれればよいのじゃ。女が男に化けて関を通ろうとするときがある。男が女装して旅する場合もあるでな」

厄介なのは、乳にまだ、ふくらみがきざさぬ少女だ。小姓や若衆などにこれを変装させると、なかなか外からでは見破れない。

「でも、そこが永年の勘というやつでな、胡乱な相手はすぐ、わかる。わかるけれども、まさかわれわれ男の関役人が、湯具を取れの胸をあけるのとは言いにくい。そこで人見女にご登場ねがうというわけじゃ」

手形に記載された人物が、はたして本物の当人かどうか、その確認も人見女の仕事にはいる。

「たとえば、臍のわきに黒子が二つある、と書かれておたらば、着物をぬがせて見ねばならぬし、脳天

に差し渡し一寸ほどの禿^はありと書かれておれば、髪をほどかせて調べねばならぬ。女相手ゆえ、女ならでは勤めかねる役儀なのじゃよ」

小静は溜め息をついた。たやすげに塚本は言うが、どうやら思いのほか、氣骨^{きぼね}の折れる仕事らしい。

「高貴^{たかき}の女性^{にょせい}にも、ときには接する折りがあるのではござりませぬか？」

「それそれ、そこじゃよ」

わが意を得た、と言いたげな顔で塚本倉三はうなずいてみせた。

「わしらがな小静さん、そなたに白羽の矢を立てたのも、そのへんを勘考^{かんこう}したからじゃ。箱根関所が設けられたそもそもから、人見女には身許の不たしかな者は取らんのだ。百姓の出であつても関所周辺の守り村の、村役ぐらゐは勤める家の女房やおふくろなどが代々依頼^{なりわい}される慣しであつた。お徳婆^{とくば}も、箱根宿の脇本陣^{わききん}、石川家の後家どのじゃで氣位^{きゐ}はいっぱし高いが、学問の素養で申さば仮名^{かな}のにじり書きがやつと……。貴人との太刀打ちは荷が重いのじゃ」

と塚本はこきおろすのだ。

「そこへゆく和小静どのは、筆跡がみごと。読み書きも達者。和歌の一首や二首、苦もなく詠む。さすが天野先生のおつれ合いじゃと定番人一同、かねがね感服しておりますのじゃ」

小静は恥じて、耳たぶを緋^{あか}くした。

先生などと呼ばれてはいたが、亡夫は寺子屋の師匠だし、小静の教養とて侍の女房ならだれもが一通りは身につけていであらうごく当り前なものにすぎない。それでも、

「お徳婆あたりとくらべたら月とすっぽんよ」

塚本は持ちあげる。

「御所づとめの上臈^{じようろう}衆、大奥や諸侯に仕える女中衆など、したたかな女どもと渡り合つても、小静どのな

らば怯みはすまい。同じ旅びとなのに、お徳は下々の女と見れば横風な顔でおどしつけ、身分の高い相手にはべこべこしくさる。どうやらこっそり、袖の下なども取り込んでおる気配なのじゃ」

「袖の下を？」

「ここだけの話じゃよ小静どの、他言はしてくださるな。手証を掴んだわけではござらぬからな」

「心得ておりまする」

「ともかく、現在ただ一人いる人見女の勤めぶりをそれとなく牽制するためにも、早急に欠員を補充せねばならぬ。まげてご承引いただけまいかな」

腰のたばこ入れを抜き出して一服うまそうに吸いつけながら塚本はつぶつた。

「と言うても、肝心のことを申さいでは思案がつくまい。二人扶持、銀子一枚のお役料のほか、出勤のお手当として一日につき米四合の支給がある。むろん毎日顔を見せずともよいのじゃ。調べの必要が生じたさい、足輕を迎えに寄こすゆえ関所に出てきてほしいのじゃよ」

六人いる定番人の待遇もけっしてよいとはいえない。年に七石たらずの薄給だから、それだけでは到底、家族を養ってはいけないのだと塚本はこぼした。

「老妻に茶屋などやらせているのも扶持米だけではくらせぬからじゃが、人見女も定番人も、身分で申さばれっきとした公儀役人なのじゃぞ小静どの」

「お手当を、小田原藩からいただくわけではありませぬので？」

「いや、銀子も扶持米も、小田原藩から出る。藩の分限帳にも士分と足輕の間にお関所定番人、人見女は載せられておるのじゃから、その意味からすれば小田原藩士に準ずるけれども、たとえば藩主の大久保家がどこぞ他国へ転封になり、番頭はじめ、これまで関所役人を勤めてきた藩士らが殿さまに従ってよそへ去っても、われらは動かぬ。『貰い受け役人』と言うてな、旧領主から新領主へ引き継がれ、そのまま関